ったあと、まずは一匹の猫が彼の身代わりとなって死ななければならない。そうしてはじめて彼は月の影響を満身に受けながら、岩壁を猫のごとくよじ登り、ポルトガルの女が待つ山上の居城にたどり着くことができるのである。

かつてフェミニズムの陣営から抗議の声が上がったことがある。この作家は『三人の女』において世紀末の性の神話を甦らせている。登場人物の女性たちがどんな人間であるかを、相手の男たちが彼女らをどう評価するかに委ねているのだから――。しかしムージルは相手に対するこのような振舞い方を『合一』では二人の女性の視点から描いており、彼女らにとって相手の男は別の状態に到達する手段でしかない。したがって、ムージルはこのことを男という性に固有の問題と見なしていたというよりは、人間学上の問題として捉えていたのであろう。『三人の女』には物語る喜びというものがあり、具体的な空間や話が積極的に描かれてゆく。この作家がこんなにわかりやすい小説を書くとは、と読者が驚くほどである。難解な『合一』を読んだあとではこの感はいっそう強い。ムージルの作品のテーマとモティーフは『テルレス』の時からほとんど変わっていないが[78]、内容と形式の関係には変化と発展がみられる。たしかに『三人の女』でも、互いを指さす比喩や形象が、目の細かい網のようにぎっしりとムージルの散文を覆っている。それでいて、読み手を圧倒せんばかりの夥しい形象は、この短編集では物語の筋を損なっていない。むしろ形象の次元と語りの次元とが渾然一体となっており、その完璧さにその後のムージルの作品が再び達することはなかった。

78　テーマとモティーフが変わっていないことは、ムージル研究において早くから気づかれていた。Annie Reniers-Servranckx: Robert Musil. Konstanz und Entwicklung von Themen, Motiven und Strukturen in den Dichtungen. Bonn 1972 を参照。